SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

水戸学の思想と教育

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文学部 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒川, 紘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000460

水戸学の思想と教育

荒川　紘

一八四一（天保一二）年、九代水戸藩主・徳川斉昭のすすめた天保の改革のなかでも目玉の事業であった弘道館が誕生した。水戸城に隣接する三の丸、五万四〇〇〇坪の地に水戸藩の藩校が建設されたのである。それまで最大であった金沢の明倫堂が一万七八〇〇坪、幕府の学校・昌平黌にしても一万一六〇〇坪でしかない。「三千載（年）未だで嘗てこれ有ざる学校」（藤田東湖『回天詩史』）の出現であった。

中心となる建物は講堂や大試験場としてつかわれた正庁と藩主の控室や藩主の子息たちの学習室があった至善堂。その北側には、句読寮、講習寮、居学寮、寄宿寮などからなる文館がたち、南側には、武道対試場、撃剣館、槍術館、柔術館などからなる武館、それに医学館、天文方などがならぶ。文館・武館の西、校地の約三分の一は、武術の調練場に当てられた。そして、正庁と調練場の間には孔子廟と鹿島神社が建てられていた。

規模だけでない、明確な教育目標をもって設立されたところに弘道館の独自さがあった。それを記したのが『弘道館記』である。尊王攘夷を目標に、教育は人としての道を弘めることをめざすべきであり、そのために、忠孝一致、文武一致、神儒一致、学問事業一致を基本とせねばならないとした。斉昭の見解をもとに、藤田東湖が会沢正志斎らの意見を聴取しながら作成したもので、水戸学の思想と教育の根幹的理念となるものであった。それは三メートルを超す石碑に刻まれ鹿島

神社のかたわらにある八卦堂に収められた。

弘道館は秀れた人材を送り出しはじめた。しかし、まもなく藩の路線の対立の影響をうけ党争の混乱に見舞われる。『弘道館記』の精神を取り戻そうとする努力もあったが、初期の活気を回復することはできなかった。それどころか、尊攘運動が高揚するなかで、弘道館はそれを阻もうとする勢力の拠点ともなるのである。

しかし、弘道館の歴史を追うだけでは水戸学の思想と教育の全貌は捉えられない。とくに、水戸藩における尊攘教育の性格を理解するためには、天保の改革の一環として藩内の各地に設立された郷校にも目をむける必要がある。規模からいえば比較にならないほど小さな、郷士、農兵、神官、医師たちを対象とする学校であるが、ここでも、『弘道館記』の精神をもって文武の教育がおこなわれ、尊攘運動に立ち上がる教師や学生たちが現われる。

水戸学の教育を考えるとき弘道館や郷校以上に重要な役割を演じたとみることのできるのが私塾である。弘道館や郷校以前から存在し、弘道館が開設されてからはその基礎教育も担当するのだが、会沢正志や藤田東湖らの営む私塾では、もっとも水戸学らしい教育が実現されていた。この身分と地域をこえて塾生が集まってきた小さな教場の姿をさぐることで、水戸学の思想と教育のはたした歴史的意義もよりはっきりと見えてくる。

1　弘道館以前の水戸藩の教育

弘道館は遅い部類の藩校に属する。しかも、一八四一年のときは仮開館とされていたのであって、本開館となると一八五七（安政四）年までくだる。藩校の構想はすでに二代藩主の徳川光圀にもあり、一六六五（寛文五）年には水戸藩に招聘した明の朱舜水に依頼して教場と聖堂の設計図「学宮図説」を画かせているが、それをもとにして作られたのは、教場と聖

堂の雛型模型であった。光圀によってはじめられた『大日本史』の編纂が藩財政を圧迫、藩校にまでは手が回らなかったのである。加えて、御三家のひとつでありながら、石高は名古屋藩、和歌山藩と比較してずっと少なかった。その名古屋藩の藩校・明倫堂の起源は藩祖・徳川義直のときにさかのぼれるし、和歌山藩の学習館でも一七一三年に設立されている。一七九八年に林家の私塾が昌平黌として幕府直轄の学校となったことが藩校の開設ブームを呼んだが、そのときにも水戸藩は藩校の建設にとりかからなかった。

といって藩士の教育を軽視していたのではない。『大日本史』の編纂は財政を圧迫していたのだが、そのために開設された編纂局の存在が水戸藩に特有な教育を生み出していたのである。一六七二（寛文一二）年、江戸の駒込藩邸にあった編纂局が小石川藩邸に移されたときから、史官が講師となって月六回、藩士を対象に経書解説の講釈が開かれるようになった。史館講釈である。移転にともなって彰考館と命名された編纂局の史官の数は二〇数名から五〇数名に増える。こうして、彰考館には教育機関としての役割もあたえられていた。後で、弘道館、郷校、私塾の授業回数にふれことがあるが、月六回の講釈というのは少ない回数でない。

この時代には水戸在住の藩士は対象となっていない。しかし、一六九〇年に光圀が水戸郊外の太田に隠居すると、彰考館は水戸城内に移されて、そこで史館講釈がおこなわれるようになった。その一〇年後に光圀が没して彰考館が水戸と江戸の両方におかれてからは、史館講釈も両地で開かれた。彰考館が水戸に一元化されるのは斉昭の登場後である。それに、朱舜水をまつる舜水祀堂が一七一二（正徳二）年に水戸の八幡小路（のちの田見小路）に建てられると、ここでも史官関係者によって藩士と庶民むけに講釈がおこなわれていた。

このような藩士教育があったから、無理をして藩校を設立する必要もなかったという面もあった。それだけでない、彰考館の史官たちが水戸城下に私塾を開きはじめるようにもなる。その嚆矢は、彰考館が水戸城内に移された後の一六九六

（元禄九）年に、史官で講釈も担当していた森尚謙が開いた私塾・儼塾である。時代がくだると、彰考館の総裁をつとめた立原翠軒は城下の自宅に私塾・此君堂をもち、この此君堂で学び三代のちの総裁となった藤田幽谷も自宅で青藍舎をはじめていた。

このように、水戸藩には彰考館に勤務する第一級の学者による教育の伝統があった。藩校はなくても、教育に熱心な藩だったのである。一八三六（天保七）年、助川（現日立市）に沿岸防備のための海防城が築かれ、家老の山野辺義観以下二五〇名あまりの家来が移住するが、その翌年には、子弟教育のための学校・養生館が設立されている。[1] 規模は小さくても、弘道館以前に藩の学校が存在していたのだ。水戸藩がいかに教育を重視していたかを物語るものである。家老の中山家の知行地であった松岡の手綱（現高萩市）には以前から北の海岸の防備を兼ねた松岡城があり、武士団が定住していた。ここにも、六代水戸藩主治保の弟信敬が一八〇三年に中山家を継ぐと、文武稽古場が設けられ、のちには就将館と称されるようになった。[2]

2　水戸学の教育理念――『弘道館記』

藩校・弘道館の設立が日程にのぼるのは、一八二九（文政一二）年に九代藩主となった徳川斉昭の天保の改革のとき、財政の再建、武士の土着などとともに弘道館の設立が改革の柱とされていた。弘道館の設立をめぐって、藩論は、それを進めようとする改革派とそれに反対する保守派に二分されたが、斉昭は設立を強行する。その推進役を担ったのは、斉昭のブレーンであった会沢正志斎と藤田東湖。東湖は藤田幽谷の長子、会沢は幽谷の最初の門下生、ふたりとも彰考館で『大日本史』の編纂にあたるとともに藩政にも携わっていた水戸学の学者である。

斉昭就任の数年後、会沢は『学制略説』と『学問所建設意見書稿』を著わし、前者では、古代中国の学制を参考にして治教一致の実学をめざす学校が設けられるべきとし、後者では、学校の組織や具体的な人事構想、教育課程についての考えを披瀝していた。斉昭も『告志篇』で、教育は文武一致、神儒一致が肝要である旨をのべていた。そして、最終的に斉昭の命によって東湖が起草したのが『弘道館記』、一八三八（天保九）年のことである。斉昭や会沢ら改革派の意見を集約したものであるが、水戸学の流れからみれば、藤田幽谷の『正名論』（一七九一年）や会沢正志斎『新論』（一八二五年）などで醸成されていた尊王攘夷論の教育論版といえるものであった。一八四二（天保一三）年に会沢正志斎は『弘道館記』を平易に解説した『退食間話』を執筆し、一八四七（弘化四）年には東湖はより詳細な解説書『弘道館記述義』をまとめる。改革派の水戸学者たちは水戸学の政治・教育思想の確立とその具体化に総力をあげてとりくんでいた。

『弘道館記』によると、弘道館は尊王攘夷論を教育の目標としながらも、校名どおり、人の歩むべき道を弘めねばならず、そのための教育の基本は、「神州の道を奉じ西土（中国のこと）の教を資り忠孝二无く、文武岐れず、学問事業その効を殊にせず」にあるとされた。神儒一致、忠孝一致、文武一致、学問事業一致。斉昭や会沢らにも説かれていた水戸学の主張をとりこんだものである。学問事業一致については、学ぶ側からの学問は教える側からいえば教育、為政者である武士にとっての事業とは政治にほかならず、『弘道館記』の結びにも、「斯の館を設けて、以てその治教を統ぶる者は誰ぞ。権中納言従三位源朝臣斉昭」と記されているように、治教一致といういいかたもされていた。

水戸学の思想の核心といえるのが神儒一致。これは人としての道である「道」についてのべているのであって、その「道」は儒教の道でもあり、神道の道でもあるという。しかし、神道と儒教を同等視しているのではなく、主体は神道にあった。『弘道館記』は、「上古、神聖、極を立て統を垂れたまひて、天地位し、万物育す。その六合に照臨し、寓内を統御したまひし所以のもの、未だ嘗て斯道に由らずんばあらざりなり」とものべていた。神聖つまり記紀の神々をその「道」の創造

者というのである。

そうではあるが、『弘道館記』は、「西土唐虞三代（堯・舜二帝と夏・殷・周の三代）の治教のごときは、資りて以て皇猷を賛けたまへり。ここに於て、斯道いよいよ大に、いよいよ明らかにして、また尚ふるなし」とものべる。天皇の大業も孔子が理想とした「唐虞三代」の教えに助けられたというのである。儒教はふかく学ばねばならない。が、日本の道の問題として理解することが大切である。この意味で神主儒従であった。館内には鹿島神社と孔子廟が建てられたが、一八四一年の開学が仮開学とされたのは鹿島神社に鹿島神宮の建御雷命がまだ分祀されていなかったためである。

もちろん、神道は天皇にたいする尊崇とむすびつく。『弘道館記述義』も、「天皇すでに天日之嗣を承けて、蒼生を撫育し、また太陽の出づる所に拠りて、万方に君臨したまふ」という。地上の世界に君臨するのは天照大神の子孫である天皇にほかならない。それを、会沢は『退食間話』で、淳朴だった古代の日本人にも儒教でいう五倫、とくに「君臣の義」のゆえであったからだと説明する。神儒一致の立場から尊王論が主張されていたのである。

忠孝一致。『弘道館記述義』は、五倫のなかでもっとも重い意味をもつ君臣間の忠と父子間の孝は対立するものではなく、おのれの真心をつくすという点で同一だとのべるが、しかし、「然らばすなわち進んで君に事へ、その大義を全くするは、親に孝なる所以なり」と君への忠が強調されるとき、忠孝一致も尊王論と重ねて理解されている。

水戸学の教育でとくに重視されたのが学問事業一致。当今の教育では実践つまり事業が蔑ろにされていることが強調される。訓詁（字句の解釈）の学に励むだけではだめであるだけでなく、道を体得し、それを世に広め、国を治めるのにふさわしい人間にならねばならない。彰考館では史官も士分として待遇されていたように、弘道館の教官も藩の士職に就き、教授頭取も藩政では小姓頭の任にあった。学問と実践の統合、実学ともよばれた[3]。この実践における最大の課題が日本を侵そうとしている夷狄を攘うこと、学問事業一致は攘夷論につらなることになる。

この学問事業一致について、会沢は、『退食間話』のなかで、唐虞三代のような古代には学問と事業は一つであったが、今日の日本ではそれが二つに分かれてしまったとして、こうのべていた。「国家を治るには、徳礼を高閣に束ね、政刑のみにて治る故、世は胥吏（小役人）の世となりて、聖賢の道を学ばざれども、小しく才智あれば目前の事を弁ずるのみにして一時の間を合するなり。学問は儒者の私業となりて、其志の老儒先生となるに止まる。訓詁を学ぶ者は文字句読に終身の力を尽くし、心性を説く者は詩書執礼の活用を講究せず」。東湖も、『弘道館記述義』で、孔子の「詩三百を誦すれども、之に授くるに政を以てして達せず。四方に使して、専対（ひとりで対応する）すること能はずんば、多しと雖も亦奚を以て為さん」（子路篇）をあげて説明していた。どんなに『詩経』の詩を暗唱していても、政治をおこなわせては十分に行き届かない人間ではどうにもならない。孔子の精神、あるいは、孔子が理想とした唐虞三代の「道」へ回帰せよ。

文武一致。武士の主たる事業は武、したがって、学問事業一致は文武一致という性格ももつ。弘道館では文と武が必修であったが、鹿島神宮の建御雷命が武神であることにも象徴されるように、弘道館では武の教育の充実がめだつ。しかも、型の武芸よりも試合が重視されていた。つまり、実用のための武芸が奨励されていたのであり、馬場として使われていた弘道館の調練場では鉄砲や大砲の訓練もおこなわれていた。その後一八五四（安政元）年には、城下近くの那珂川岸に広大な砲術の訓練場・神勢館が設立された。

3　『弘道館記』の源流——水戸学の成立

尊王攘夷論を目標に、神儒の学問につとめ、それを実践する。『大日本史』の編纂にあたった史官の講釈にさかのぼれる水戸藩の教育は弘道館の教育に結実した。それとともに、『弘道館記』にまとめられた教育理念は『大日本史』に発する水

戸学の思想のエッセンスといえるものであった。後で水戸学の教育によって高揚する尊攘運動の意味を考えるためには、『大日本史』から『弘道館記』にいたる水戸学の流れの基本点を押さえておかねばならない。

一六五七（明暦三）年に着手された『大日本史』は司馬遷の『史記』を範とする紀伝体の歴史書で、歴史のなかから道徳の鑑を読みとろうとするのが編纂の目的であった。その道徳の基準となるのは儒教的な名分論、それによって歴史上の人物に評価をくだそうとしていたのである。しかし、天皇は名分論的な評価を超えた存在とされて、神武から後小松天皇までの一〇〇代の天皇が支配者をあつかう「本紀」にとりあげられた。それでも、天皇を天照大神の子孫とは見ない。光圀は、記紀の神代はとりとめがないものであり、初代天皇・神武の前に天照大神などの神々の系譜を掲載するべきではないと考えていた。(4)

実質的な支配者であっても、将軍は「本紀」に載せられない。といって、支配者以外をあつかう「列伝」であつかうわけにもいかない。そこで、もうひとつの範疇「将軍伝」が設けられた。新しい「名」を導入することで妥協をはかっていたのである。(5) 将軍をどう位置づけるか、それは水戸学で追求されつづけた思想的課題であった。

光圀の死後停滞していた編纂事業は、六代藩主・治保のとき、立原翠軒の登場で活発化、水戸学も活気をとりもどす。その記念碑的な論稿となるのが、一七九一（寛成三）年、彰考館に入ってまもない藤田幽谷が老中・松平定信の求めに応じて書いた『正名論』である。この幕藩体制の危機を直視した国家論は、水戸学が歴史学から政治学へ転換したことをしめす。

『正名論』は、「甚しいかな、名分の天下国家において、正しく且つ厳ならざるべからずや。それなほ天地の易ふべかっらざるごときか。天地ありて、然る後に君臣あり。君臣ありて、然る後に上下あり」とはじまる。幽谷も名分論にたち、名と分は天と地がそうであるように不変であり、君臣の関係もまた、天と地のように絶対的な上下の関係にあるとする。だから、暴君であった殷の紂王にも天子として仕えた周の文王が模範的な臣として称えられる。

ひるがえって日本では、「皇祖開闢より、天を父とし地を母として、聖子・神孫、世明徳を継ぎて、以て四海に照臨したまふ」のであり、「君」である天皇は天照大神の子孫であるという神聖な血統ゆえの尊厳さが主張された。本居宣長の国学が広く浸透する時代である。幽谷も記紀の神話を国家論の基礎にすえた。そこで、文王に比される将軍とされたのは、もちろん、「戦国の際に生れ、干戈（たてとほこ）を以て海内を平定し、残（残賊）に勝ち殺（死刑）を去り、皇室を翼戴」した徳川家康であった。

そうして、幽谷は国家の理想について、「この故に幕府、皇室を尊べば、すなわち諸侯、幕府を崇（たつと）び、諸侯、幕府を崇べば、すなわち卿・大夫、諸侯を敬す。夫れ然る後に上下間保ち、万邦協和す」という。尊王論であるが、注意しなければならないのは、万民による天皇尊崇をもとめていたのではない。一般武士や庶民は大名を、大名は将軍を崇ぶべきであり、そして、将軍は天皇を尊ばねばなれないとする。尊崇にも秩序があるというのだ。一君万民論ではない。尊王論とはいっても、大名や士庶にとっては敬幕論、『大日本史』では、別の範疇であつかわれた天皇と将軍をこう位置づけた。

しかし、現実は理想からほど遠い。一七九七（寛政九）年には藩主・治保に提出した『丁巳封事』で、幽谷は、武士の風紀の衰退や民衆の生活の困窮をあげて、政治の基本が損なわれているとして藩政・幕政を批判していた。さらに、ロシアの使節ラックスマンが日本に開港をもとめたことにもふれ、外国からの侵略の危険性と海防の充実を喚起する。東湖の『回天詩史』によると、一八二四（文政七）年に大津浜にイギリスの捕鯨船員が上陸したとき、幽谷は上陸した彼らを斬るべしとして子息の東湖を赴かせようとしている（船員が釈放されていたため実行にはおよばなかった）。

この幽谷の国家論・政治論は、門下生の会沢正志斎にうけつがれた。大津浜事件では、交渉で筆談役をつとめた会沢は、その翌年に『新論』を著わし、天照大神と天皇とのつながりを基軸とする「国体」の思想と「国体」を夷狄の侵略から守るための攘夷論を展開していた。

そこでは、記紀の神話にたちながらも、会沢は儒教の論理によって解釈しようとしていた。神儒一致、水戸学が儒教を排撃する本居宣長の国学と決定的に対立するところである。[6]『新論』国体上では、天照大神を中国思想の核心部にあった天と結びつけて考え、「昔者、天祖（天照大神）、肇めて鴻基を建てたまふや、位はすなわち天位、徳はすなわち天徳にして、以て天業を経綸（治めること）し、細大のこと、一も天にあらざるものなし」としていた。天照大神は天と一体であり、その天照大神と一体であったのが天皇である。だから、天皇は天とともに悠久、天皇は名分論を超えた存在となる。この天皇のもと人民はみな天子の民として、天下は大いに治まっていたが、鎌倉・室町幕府のように朝廷に逆らうようなこともあった。しかし、徳川家康は天照大神の不朽の教えを受け継ぎ、忠孝を基礎として二〇〇年の太平の業を達成、それによって、「天下の土地人民、その治は一に帰し、海内一塗、皆天朝の仁を仰ぎて、幕府の義に服す。天下の勢、治れりと謂ふべし」となったと会沢はいう。会沢も尊王敬幕論者であった。もちろん、幕府もその分としての責任をはたさねばならないのであるが。

水戸学はあるべき国体の思想を提示し、幕府のはたすべき任務について論ずる。わけても欧米列強の脅威を説き、それにたいする具体的な防衛策についても言及する。それは幕府の責任の所在を明らかにすることでもあった（といって幕府を否定しようとはしない。が、否定する論理を提供していた）。

藩主・斉昭はこのような水戸学の国家論・政治論にたって改革にのりだした。幕藩体制の行き詰まりや外国船の襲来といった国難を打開するにも水戸学にもとづく藩校教育に藩は総力を傾注せねばならない。水戸学の教育思想の結集としての『弘道館記』がまとめられ、弘道館が設立されたのである。

国難にたいする認識は水戸藩だけではなかった。それゆえ、弘道館の設立は天下の衆目を集めることになる。弘道館をモデルにして藩校を創設したり、既存の藩校を改革しようとする藩も現われる。一八五五年に設立された福井藩の明道館

もそうであった。その設立理念を藩主・松平慶永のために橋本左内が草した『明道館之記』でも、文武一致、政教一致といった実学を強調していた[7]。左内が敬慕していた東湖の『弘道館記述義』を下敷きにして書かれたのは明白である。校名の明道館も弘道館を参考にして生まれたと考えられている。

4　弘道館の教育

一八四〇年二月に弘道館の建設は開始され、あわせて教員人事もすすめられた。藤田東湖が弘道館掛に就任、文館では教授頭取の会沢正志斎と青山延于以下、教授、訓導、管庫、舎長などの教職、武館では各流の武術師範らが選任された[8]。開館式は一八四一年八月一日、その翌日から文武の授業がはじめられた。

教育課程の特徴のひとつは、一五歳までの初等教育は城下の私塾が担当する、という点にあった。八、九歳から私塾の教師のもとで素読や習書を学んだのである。私塾が充実していたのでこのような体制をとることができた。一八五七年の正式開館以後は、館の教員から選任されたものが、このための私塾教師を兼ねることになり、月六度は在宅してその指導にあたった。彰考館の史官による私塾の伝統をうけついだといえる。たとえば、弘道館の教授に任ぜられた青山延光（延于の子）の塾には四〇から六〇人の塾生がいたという（庶民の子弟もおり、すべてが弘道館入学予定者ではない[9]）。塾で学んだ生徒は『孝経』や『論語』といった儒学の基礎についての試験をへて、入学が許可された。

もうひとつの特徴は、四〇歳までの全藩士に就学を義務づけた点である。学問事業一致の精神からも、藩政に携わるものはつねに学問と武芸を離れてはならないと考えられていた。課業の仕方も独自で、登学すべき日数は、上士であるほど、嫡子ほど、また年少者ほど多く定められていた。三〇〇石以上の嫡子では、一五歳から二九歳までは月一五日、三〇歳か

ら三九歳までは月七日。登学日数不足の学生には、翌年度にその分の登学を追加する「過詰」が課せられた。諸卒（足軽）は武館には通学できたが、文館に通学できるのは特別に認められたものだけであった。

会沢が『学問所建設意見書稿』で「御家中学問仕るべき事勿論に候所、就中厚禄の子弟は、別て教養無之候ては相成らず候間、古虎の門に倣ひ、教養の法を立て申し度く候」とのべていた考えが採用されたのであろう。封建体制の秩序維持のためには、世襲制度と能力主義の矛盾を小さくせねばならないとの考えからである。おなじような課業法は弘道館をモデルにして設立された福井藩の明道館でも採用された[10]。上士の子弟のみに入学が許された会津藩の日新館のような例はあるが、このように細かな規定は他藩には見られない[11]。

弘道館では一〇名ほどのクラスからなるゼミ形式の授業が基本、訓導や舎長から経書の句読の指導をうける会読生の段階をへて、みずからも発表者となる輪講生に進む。これら平精の授業のテキストは『論語』にはじまり『孟子』や『春秋左氏伝』がつかわれていた。正月の学年始めと一二月の学年終わりには『日本書紀』神代巻の講義がなされていたものの、『弘道館記』の標榜するような神儒一致の教育が日常実施されていたようには見えない[12]。儒教を重んじていた会沢の意向が反映していたのだろうか。

輪講生のなかで成績が優秀なものは居学生に進めた。居学生になると、寄宿寮の部屋が与えられ、正庁でなされる教授や教授頭取の講義を聴くことができた。その優秀者のなかから教官スタッフである舎長や訓導に登用されるものもでる。一八歳で居学生になった茅根伊予之介は二〇歳で舎長、三一歳で訓導となった。原市之進は一七歳で居学生、二六歳で舎長、二七歳で訓導となる[13]。

文武一致の方針から、武道は必修とされた。兵学、射術、馬術、槍術、剣術、砲術、火術などの科目があって、希望で選択できた。こちらの方は入学試験はない。午前は文館で学問を修め、午後には武館で武道を鍛える、「朝文夕武」の方式

がとられた。文と武の教育が中心の弘道館であったが、そのほかに、歌学、天文、算学、地図、音楽、諸礼などの科目があり、自由に選択できた。弘道館には、尊攘教育にとどまらない総合教育の学園という一面もあったのである。

とくに注目されるのは、西洋医学の種痘法もとりいれられていた医師むけの医学研修である。そのために特別に医学館が建てられていた。一八五五（安政二）年には適塾出身の下間良弼を招聘、この医学館内でオランダ語の教育もはじめていた。しかし、受講が許されたのは八名の特別の学生だけだった。大砲の鋳造など洋学の実用性を重視していた斉昭も背後にキリスト教の控える洋学には警戒的な態度をくずさなかった。

この洋学にたいする攘夷的な見方も水戸学の特徴であった。会沢は、『息邪漫録』のなかで、洋学教育にふれて、「人として人倫を知らざれば禽獣に近し。心は禽獣にして、巧芸博物のみなれば、蜘の網を巧にし蜂の巣を巧にするに異ならず」とのべている。(14)「巧芸博物」といった洋学の教育を排斥するのではないが、教育の基本は人倫でなければならないというのだ。東湖も『常陸帯』で、「夷狄の人、智巧はすぐれぬれど、其の教に至りては禽獣の道、人に用ゆ可からざる如く、皇国に用ゆ可からず」といっていた。「巧芸博物」も実学と称されるようになるが、水戸学はこの洋学的実学を排斥はしないものの、二義的なものと見ていたのである。

弘道館には卒業といったものはない。生涯教育であった。義務は四〇歳までだが、四〇歳を過ぎても通学ができる。武士であるかぎり、学問を欠かしてはならない。これも学問事業一致の精神からである。

5　弘道館の教育改革

出だしは順調であった。文館には一〇〇〇人を超える藩士が登学、しかも、そのうちの八割以上が規定日数をこえてい

た。[15] 武道の登録者数は延三三〇一人。掛け持ちの数であるが、武道のほうが人気があったようである。開館の翌年の一八四二年の一〇月一二日から二四日かけておこなわれた第一回の大試験では、約四〇〇名の学生が受験、二九名が表彰された。表彰者のなかには、茅根伊予之介、原市之進、住谷寅之介、大胡聿蔵、菊池為三郎など、尊攘運動の志士として活躍するものがいたが、他方で、反改革派の首領となった市川三左衛門、朝比奈弥太郎もおり、そのメンバーとして活躍した内藤耻叟もそのひとりであった。改革派の人間も反改革派の人間も輩出していた。

しかし、それは長続きしなかった。開館の三年後の一八四四（弘化元）年五月、斉昭は藩政改革の行き過ぎを咎められ、幕命で致仕（隠居）・謹慎、藤田東湖、戸田蓬軒らの改革派藩士も蟄居処分となった結果、弘道館の主要なポストは、もともと藩校の設立に消極的・否定的であった反改革派で占められるようになる。その翌年の三月には会沢ら多くの教官も免職となった。それに抗議した弘道館の舎長であった鮎沢伊太夫、改革派の郡奉行で奥祐筆であった金子孫二郎、高橋多一郎も処罰をうける。このような改革派と反改革派の対立で弘道館は混乱、登学者数も減少する。

それでも、一八四九（嘉永二）年に斉昭の謹慎が解かれて、幕政への関与が認められるようになると、弘道館に改革派が戻りはじめ、一八五二年以降青山延光や会沢らの旧教官陣が復帰する。東湖も江戸弘道館の学校奉行兼務となる。つづいて、茅根伊予之介、石川明徳、寺門謹、藤田健（東湖の長子）など、東湖や会沢の門人が多数訓導に採用された。

しかし、弘道館は幕政・藩政の混乱に翻弄され、創設期の活気を取り戻せなかった。江戸で東湖と親交があり、弘道館の成功に期待を寄せていた熊本藩の横井小楠も、一八五〇年に東湖にあてた手紙で、一八四二年から会沢の南街塾で学んでいた久留米藩の村上守太郎から聞いたとして、その混乱を気遣っている。[16] だからであろう、一八五二年に福井藩のもとめに応じて執筆した『学校問答書』では、藩校では真の「学政一致」の教育が実行されず、あげくは「喧嘩の場所」となっているのであって、とても真の人材は育たない、それゆえ、藩校の設立には慎重でなければならないと意見が表明されて

いた。[17] それでも、福井藩は弘道館をモデルにして明道館を設立するのだが。

水戸藩の不運は重なる。藤田東湖と戸田蓬軒が一八五五（安政二）年、安政の大地震で命を落としたことは、弘道館の混乱に拍車をかけた。その混乱を示しているのが、一八五七年に正式の開館を控えて、原市之進、下野隼次郎、石河幹二郎らの訓導と舎長らによって、個人的あるいは連名で提出された弘道館にたいする要望書である。[18] 学問事業一致にかんしていえば、執政たちが弘道館に顔を見せず、また、教授頭取は小姓頭としての政務にあたらない。小楠も指摘していたことである。神儒一致のことでは、講釈や試験の課題は漢籍にかんすることばかりで、国書がとりあげられない。『古事記』や『日本書紀』が読まれなくてはならない、というのである。事実、会読生や輪講生のテキストが経書中心であったのを反映してか、弘道館の蔵書の国書は全体のわずか六分の一、七五種しかなかった。[19] 文武一致についても、学生は文あるいは武のいずれかに偏向しているという。つまるところ、『弘道館記』の精神が忘れられているというのである。加えて、恩賞でも、道徳の面は軽く見られ、芸達者が優遇される。学生の遊惰もめだつが、とくに「大臣高禄」の子弟がそうである。学生が勉学意欲を失っている原因にかんしては、学生と教師が親しく接する機会が少ないこと、備えの図書や武具が少ないことをあげていた。

そこで、本開館にあわせて弘道館に復帰した会沢は同僚たちとも相談して、あらためて弘道館の学生向けに『弘道館学則』を起草している。そこでは、『弘道館記』で説かれた神儒一致、忠孝一致、文武一致、学問事業一致の深意を誠実に実行せねばならないとした上で、『古事記』や『日本書紀』などを広く学ぶべきこと、技術的面だけの熟達に満足してはならないことなどが強調されていた。訓導と舎長の批判や要望に応えようとしたものであった。

こうして本開館にこぎつけたのだが、その翌年一八五八年には将軍継嗣、条約調印をめぐる幕政の混乱に弘道館も巻き込まれる。勅許のないまま日米修好通商条約を締結した大老井伊直弼に抗議した斉昭らが処罰される一方、朝廷からは水

戸藩に幕府の政策を批判する密勅が降下された。幕府と水戸藩の激突、そのなかで、水戸藩では、家老の安島帯刀、鵜飼吉左衛門・幸吉父子や茅根伊予之助は死罪、鮎沢伊太夫は遠島となる。吉田松陰や橋本左内も処刑された安政の大獄の最大の狙いは水戸藩を中心とする尊攘派の勢力の弾圧にあった。

この幕府による水戸藩尊攘派にたいする弾圧が尊攘派の志士を過激な行動に走らせることになる。皮肉なことだが、弘道館は学問事業一致の実験場となった。いまは「学問」よりも「事業」、弘道館の一部学生は学外に出て尊攘激派の藩士やそれに同調する農民有志と連帯する。この激派＝天狗党の活動拠点となったのは、藩の各地に設立されていた郷校であった。それにたいして、教授頭取の会沢は激派学生を客気にはやる行動と批判、その結果、弘道館の尊攘運動は、天狗党とよばれた学外の激派と会沢を領袖とする学内の鎮派に分裂した。諸生党とよばれた学内の鎮派は門閥派とむすびつく。もともと上層武士の教育に比重がおかれた弘道館の諸生（学生のこと）が門閥派とむすびつくのは自然の勢いであったといえよう。

一八六四（元治元）年に起こった天狗党の筑波山挙兵に端を発した天狗諸生の乱では、水戸藩は血で血を洗う「喧嘩の場所」となり、そのため弘道館の教育は中断を余儀なくされた。天狗党の主力が鎮圧され、藩政を押さえた門閥派によって弘道館が再開されたときには、『弘道館記』にもとづく尊攘教育は排され、朱子学によるとの方針が打ちだされもした。[20]

6　郷校の教育

尊攘激派の活動拠点となった郷校のなかで最初に設立されたのは小川の稽医館。その名のとおり医師の研修を目的とする学校で、一八〇四（文化元）年に設立されていた。この郷校の設立の中心となったのは、彰考館では幽谷の同僚で、郡奉

行も兼ねていた小宮山楓軒、地元の有志の協力もあった。二番目の郷校は一八〇六年に楓軒の指導のもとに延方につくられたに延方学校。ここでは、医学教育もなされたが、農民たちにも儒教倫理を授けるのが主たる目的の学校であった。

このふたつの郷校につづいて、斉昭の天保改革の事業として天保・嘉永年間に四つの郷校が新設された。湊の敬業館、太田の益習館、大久保の興芸館（のちの暇修館）、野口の時雍館である。その設立に尽力したのは尊攘派の郡奉行たちであった。これらの郷校でも設立当初は医学の教育が重視されていたが、注目されるのは、尊攘教育が教育目標におかれていた点にある。小弘道館といえるものであった。

斉昭が幕政に復帰する安政期には、大子、小菅、大宮、町田、秋庭、鳥羽田、玉造、潮来、馬頭にも郷校が設立される。これらの郷校は最初から尊王攘夷を教育目標にかかげた文武の学校で、郷士、農兵、神官（修験も準神官とみなされていた）、医師らの学生に儒学の教育とともに剣術や砲術の訓練をほどこしていた。一八五五（安政二）年に沿岸警備のために生まれた農兵制と一体のものであったが、一七九二（寛政元）年からすすめられた郷士制度を実効化するためにも必要であった。

安政期には稽医館をふくめてすべての郷校が尊攘のための文武の学校に改編され、嘉永以前に設立された郷校も、稽医館が小川郷校と変えられたように、土地の名を冠してよばれるようになる。弘道館とくらべれば、規模ははるかに小さいが、それでも郷校には講義用の文館と武術の訓練場が設けられていた。小菅郷校の例でみると、総面積は一五六六坪、三つの講義用室と附属の部屋からなる文館のほかに練兵場（八八四坪）と矢場があった[21]。

ここでは弘道館のように身分による出席回数の違いはないものの、授業の回数は少なく、月二回の授業のほかに、春秋の大会（二泊三日）や小会（一日）があるだけであった。学生とはいっても仕事をもつ。とくに、農業従事者が多いため、農繁期には休みとなった。文の教育のテキストには、『孝経』、四書五経、そして『古事記』『日本書紀』『古語拾遺』『弘道館

記』などの国書、それに医書が利用され、それを基礎にして尊王攘夷思想を教授する。テキストは郷校に所蔵されており、大久保郷校（暇修館）の場合、三五〇部、三七〇〇冊の漢籍と国書があったという。[22] それに、『新論』をもとにして水戸学の講義もおこなわれた。一八四三（天保一四）年、野口の時雍館では会沢が『新論』を平易に解説した『迪彝篇』を刊行、それを教科書に使用している。[23] 一八五三（安政二）年の大久保郷校の大会の冒頭では、床の間に『弘道館記』と孔子像を掛け、世話役の宮田篤親が『日本書紀』の一節を講じたという。[24] 専任の教師が担当するほか、弘道館の教官が派遣されたり、郡奉行が出張したりもした。

郷校そのものは水戸藩独自のものではないが、水戸藩の郷校は独自な役割をはたすことになる。他の藩では、領内僻遠の地に滞在する藩士のための郷校で藩校の分校に位置づけられるものや農民や町民のための郷校があったが、水戸藩の郷校はその中間的な性格のもの、主に武士と農民の中間的身分であった郷士と農兵のための学校であったところからくるものであった。しかも、郷士と農兵が多数の農民の支持をえて改革・尊攘派の藩士とむすびつき、保守・門閥派や弘道館の諸生に対抗した。

郷士というのはがんらい旧族名家の有力農民が苗字帯刀をゆるされた制度であるが、八代藩主・斎脩の時代から多額の献金で郷士となる豪農・豪商もあらわれる。郡奉行の下に配され、実質的に武士として働いていた。[25] 農兵は海防のための措置、武器を貸与され、帯刀もゆるされた。郷校はこれら郷士と農兵の訓練所、藩の全域が戦闘体制に組み込まれたのである。

徳川幕府は幕藩体制の確立のために武器を農民からとりあげ、武士を城下に集めたものの、藩財政の窮状と列強の侵攻はそれを許さなくなっていた。それほどまでに、幕藩体制は深刻な矛盾に逢着していたのである。沿岸防備のために助川に藩士を土着させた海防城を築き、松岡も別高とし、松岡城を中心とする城下町がつくられていたが、それだけでは間に

合わなかった。郷士に加え農兵も動員しなければならなかったのである。郷士と農兵という幕藩体制を維持するために採用された政策はその体制を根底から切り崩す可能性をはらむものでもあった。

7　郷校の尊攘運動

幕藩体制の矛盾的存在であった郷校が現実に幕藩体制を揺るがしはじめた。設備も教師陣容も弘道館とは比較にもならない郷校ではあったが、学問事業一致を地でゆく教育がおこなわれ、そこからは反幕の闘争に立ち上がるものも現われる。

一八六〇（万延元）年に、幕府の最高権力者であった大老井伊直弼を斬った桜田門外の変を指導したのは、斉昭の側近として郷校の設立に尽力した高橋多一郎と金子孫二郎であった。実行部隊の総指揮者となった関鉄之助は高橋と金子のもとで働いていた郡奉行所の役人であり、行動隊の中心メンバーであった斎藤監物は、静神社の神官で水戸東照宮や弘道館内の鹿島神社の神職をつとめる一方で、大宮郷校の教師でもあった。大久保郷校からは海後嵯峨之介、町田郷校からは世話役の後藤兵司が井伊の襲撃に加わった。

それは安政の大獄にたいする「捲返し」であるとともに、勅許を待たずに日米修好通商条約を調印したことにたいする天誅であった。とはいえ、老中に提出された「斬奸趣意書」は、条約の無断調印で天朝を蔑ろにし、おのれの権威をふるうために安政の大獄の暴挙に走った大老・井伊を天に代わって斬戮し、それによって幕政を正道にもどすことが目的であって、幕府に敵対しようとすることではないことを強調していた。[26] 討幕は意図になかった。敬幕からの止むに止まれぬ行動であった。それでも、公然たる彼らの行動とその結果は、徳富蘇峰のことばを借りれば「広く天下向かって、幕府の与み易きことを広告」することになった。[27]

行動はつづく。大久保郷校の黒沢五郎は、イギリス公使オールコックが陸路大阪から江戸に入ったのに憤激、同志とともに東禅寺のイギリス公使館を襲撃、さらに、坂下門外で公武融和と開国をすすめる老中安藤信正を襲う。郷校関係者の多くが尊攘運動に走りはじめていた。

この坂下門外の変の二年後の一八六四（元治元）年、藤田東湖の庶子の藤田小四郎が郷士の竹内百太郎、修験の岩谷敬一郎らとともに、攘夷が延期されているのを悲憤、みずから攘夷の先鋒に立とうとした。天狗党の筑波山挙兵である。これを指導したのも郷校の教師たちであった。当時、藤田小四郎は小川郷校の館長（医学の学校だった稽医館も文武の教場と変わっていた）、竹内百太郎は玉造郷校の館長、岩谷敬一郎は潮来郷校の館長であった。

郷士の子に生まれた竹内百太郎は東湖の青藍舎から佐久間象山の門下生となり砲術を学んでいた。密勅返上拒否に奔走、一八六三（文久三）年二月には、上京して長州の志士と交わるが、秋に帰国して、小川郷校の館長、そして玉造郷校の館長となる。修験とはいっても文武に秀でた岩谷敬一郎は玉造郷校の館長をへて潮来郷校の館長となっていた。南部の郷校は尊攘派の活動拠点となっており、彼らがまず決起をよびかけたのも郷校の生徒たちであった。

この一年近くにおよぶ天狗党の挙兵は、水戸藩内で、幕府追討総括の田沼意尊が指揮する幕府軍と諸生軍との闘争を強いられ、最後には、小四郎ら約一〇〇〇名が京都の朝廷に直訴しようとして西上するが、加賀藩に降伏して終わる。当時京都守護職の任にあった一橋慶喜は天狗党の嘆願書のうけとりを拒否、田沼意尊によって天狗党三五二名が斬首され、一三八名は遠島に処せられた。

西上はしなかったが、注目される天狗党の主要メンバーのひとりに田中愿蔵がいる。藩医猿田玄碩の子に生まれた田中は伍軒塾では小四郎の学友であった。弘道館に入学、さらに江戸にでて昌平黌で安井息軒に学び、一八六二年に帰国して、野口郷校の館長をつとめていた。

田中愿蔵に率いられた約三〇〇名の隊には士分のものは少なく、多くは農民、修験、僧侶、無頼のものも抱えた混成部隊、しかも他藩のものが多かった。草莽の志士といってよい。が、乱暴狼藉に走るとの評判もたった。小四郎と対立して除名され、途中から独自な行動をとることになるのだが、本隊を支援、助川海防城を占拠するなどして幕府・諸生軍と戦うが、八溝山（茨城、福島、栃木県にまたがる山）で解散、多くは捕縛され斬られた。田中は大子の北の奥州・塙（現福島県塙町）において代官の役人によって斬首される。

田中が除名されたのは、挙兵の目的の対立からである。藤田小四郎が水戸学の伝統にしたがって「尊王敬幕」であったのにたいして、田中愿蔵の主張は「尊王討幕」、「天皇親政の古に復す事こそ真の勤皇であり、攘夷である。我が部隊に参加する者は、全身全霊を挙げて天朝に殉ぜんとする者共のみである」と主張していた。[28] そのためには、甲府に待機する別動隊と挟撃して甲府城を陥れ、また駿河を襲って西から幕府を孤立させて、幕府内部に一変動を起こさせようとしていたという。[29]

たしかに、幽谷の『正名論』以来、水戸学は名分論によって幕府の地位を正当化しようとしてきた。しかし、孔子はいっていた、「必ずや、名を正さんか」（子路篇）。幕府も名にふさわしい分をつくさねばならない、今は攘夷という責任を果たさねばならない。そうでなければ、幕府は否定されるべきだとの考えが現われるのは当然であった。天と同じく永遠であるのは朝廷だけである。会沢の国体論からも一君万民論の理論的可能性が読みとれるのであって、『新論』国体上も、かつては天皇のもと人民はみな天子の民として、天下は大いに治まっていたとのべていた。『下学邇言』にも、「余謂へらく神州は万国の元首、皇統二あるを得ず。万民を以て一君を奉ず、其の義臣子の分を尽くすにあり」とのことばが見られる。とはいえ、会沢は幕藩体制を否定しはしなかった。小四郎もそうであった。が、田中はそこから討幕に突き進もうとした。それは、田中が武士でなかったことも無関係でないだろうし、田中が館長であった郷校が非武士階級の学校であったこと

も見落としてはならないであろう。それに、田中の隊を構成する隊員の多くが草莽の志士たちであったことも無視できないだろう。

これらの点を考えてみると、田中の思想と行動は、長州の藩医の子で藩校・明倫館から吉田松陰の松下村塾に学んだ久坂玄瑞のそれとよく似ている。尊攘急進派として草莽の志士を組織、御殿山イギリス公使館の焼き打ちや下関でのアメリカ船砲撃を指導していた久坂は、土佐勤王党の武市瑞山に「両藩とも存じ候とも、恐れ多くも皇統綿々、万乗の君（天皇）の御叡慮あい貫き申さずては、神州に衣食する甲斐は之無きかと、友人ども申し居り候こと御座候」（文久二年一月二三日、この手紙を運んだのは坂本龍馬）との書簡を書き送っている。[30] 藩が存在していても、天皇の御心が実現できなければ、この国に生きていたとてもなんの甲斐もない。永遠であるのは天皇のみとして幕藩体制を否定した久坂も、一八六四年、京都で幕府軍と戦った禁門の変で敗れ、自刃して果てる。ひとつの時代状況と似た成育環境が、よく似た若いふたりの人間を生んでいた。

ふたりに共通する成育環境に私塾がある。久坂が吉田松陰の松下村塾で尊攘教育の洗礼をうけていたように田中も原市之進の伍軒塾で尊攘教育を授かる。原市之進は東湖の従弟で東湖の青藍舎に学んでいた。

松下村塾がそうであったように、水戸の私塾からも多くの尊攘派の志士が輩出される。これまで名のあがった人物についていえば、桜田門外の変の斎藤監物は東湖の青藍舎出身、一時は加倉井砂山の日新塾にも学んでいる。藤田小四郎は伍軒塾と日新塾に学び、竹内百太郎は青藍舎に学んでいた。彼らだけでない。郷校の教師には東湖の青藍舎と伍軒塾の出身者が多かった。尊攘運動の拠点となった郷校を考えるためにも私塾に目をむけねばならない。

8　水戸の私塾

藤田幽谷の青藍舎

寛政の改革で松平定信が文武を奨励したのが刺激となって全国的に私塾が盛んに設立されたが、水戸でも、一八〇九（文化六）年の「学問指南之姓名」によると、立原翠軒や藤田幽谷の塾をふくめて二四の私塾が存在していた。このほかにも、「読書手習」の塾つまり寺子屋が四三あった。上記の私塾のうち一一の私塾は寺子屋も兼ねていた[31]。家老の中山氏の知行地であった松岡の地にも三つの私塾が開かれていた[32]。

弘道館の設立とともに私塾のなかにはその基礎教育を担当するところも出てくるが、ここで注目したいのは、尊攘派の幽谷・東湖父子や会沢らが開いていた私塾である。

その尊攘派の最初期の塾が藤田幽谷の私塾であったが、その幽谷自身が私塾に育てられた人間だった。一七七四（安永三）年に水戸城下の古着屋に生まれた幽谷は近在の小川勘介から句読の基本を習い、一〇歳のとき青木元楨に四書五経を学んだ後、立原翠軒の此君堂に入っている。小川勘介や青木元楨のところは、寺子屋というべきかもしれないが、広い意味での私塾といえよう。寺子屋と私塾の境界ははっきりとせず、寺子屋でも『孝経』や『論語』がテキストにつかわれることも少なくない。一五歳のとき彰考館の総裁となっていた翠軒の推薦で彰考館生となり、士分にとりたてられた。「幼くして神童を以て称せられる」（会沢正志斎『及門遺範』）生来の才能がものをいったとしても、私塾での教育なしには身分の壁を超えることはできなかったろう。

『正名論』を書いた一八歳のころ、下級武士の子であった一〇歳の会沢正志斎が入門、しだいに弟子も増えたので、一八〇三（享和二）年、二九歳のとき私塾・青藍舎の看板を掲げた。その間、二四歳から三年の間は『丁巳封事』で幕政・藩

政を批判したのがもとで蟄居となるが、農政改革を論じた『勧農或問』が生まれるのはこの時期である。青藍舎の開設後、三四歳のとき翠軒の三代あとの彰考館総裁に就任する。その翌年には、総裁のまま浜田郡の郡奉行をつとめ、五年後に郡奉行を解任されると、それまで以上に塾の教育に専念するようになった。

幽谷の塾の教育がどのようなものであったか。一〇歳から一八歳まで幽谷の教えを受け、彰考館でも幽谷とともに働いていた会沢正志斎は、幽谷の言行録というべき『及門遺範』を著わしており、そこから教育者・幽谷の姿を知ることができる。

それによると、教育の基本に忠孝と君臣をおいた幽谷は、「天祖統を垂れ給ひ、天孫継承、三器を奉じて以て宇内に照臨し給ふ。皇統緜緜天壌と窮り無く、実に天祖の命じ給ふ所の如し。是れ神州の四海万国に冠たる所以なり」とのことを塾生に話すのが常であったという。『古事記』や『日本書紀』などの記すように、天皇は天照大神の子孫、それゆえ、日本は世界に冠絶する国である。幽谷は尊王論者の教師であった。

しかし、幽谷は入門者には、まず孔子の精神を学ぶこと、儒学の教養を身につけることを求めた。「先生は則ち先ず孝経を授けて之に次ぐに四書五経を以てす」である。余力があれば、『史記』、『春秋左氏伝』、『国語』、『漢書』にすすむ。加えて、君臣父子の名分、華夷内外の弁などを説き、海外の情勢とその変化などを語り、攘夷の問題に塾生の喚起をうながしていた。[33] 神儒一致の教育をめざしていたといってよい。

そのなかで幽谷はそれが書物の学習に終わってはならないことを強調してやまない。やはり『及門遺範』によると、幽谷は会沢に「学者（学生）は君子たることを学び、儒者たることを学ぶに非ず」とも「道は成人の道、儒者の私業に非ず」とものべていた。「君子」は孔子が理想とした仁を体得した人間のこと、「成人」もほとんど同意義の言葉で、人格を完成させた人間といってよいだろう。[34] 学生はその「君子」「成人」をめざすべきなのであって、経書の注釈にあけくれるような

「儒者」になってはならないと諭していたのである。経書を学ぶことも必要だが、なによりも「虚文を後にして実行を先にす」である。学問事業一致である。

ここまでは、『弘道館記』の教育理念と基本的に変わらない。神儒の学問を事業として実践する。前述のように、大津浜事件では、上陸した船員を東湖に斬らせようとする。孔子の「志士仁人は生を求めて以て仁を害すること無し。身を殺して以て仁を成すこと有り」（衛霊公篇）を実践しようとする、確信的な攘夷論者であった。幽谷の塾で水戸学の思想の教育がはじまっていたのである。

幽谷は「君子」「征人」というが、幽谷はおなじような人間に育てようとするのではない。すべての塾生に命を賭した実践をもとめたのではなかった。『及門遺範』も「要は人をして其の所長を尽さむるに在り」といっていたように、個性を大切にしようとしていた。いろいろな君子がいていいのだ。そのような教育が可能なのが私塾であった。それでも、幽谷の塾や幽谷門下の会沢や東湖の塾からは、「身を殺して以て仁を成」そうとする志士が育つ。

塾生の個性を大切にする幽谷も、身分は問わない。町人でも農民でもよい、意欲のあるものであればだれでも受け入れた。幽谷は町人の子であったが、幽谷門下の会沢は下級武士の子、豊田天功は農民の子であった。私塾を介して封建社会にあっても身分の移動が可能となっていたのである。

弘道館が開設されたとき、幽谷の青藍舎で学んだ多くの人材が参加した。会沢正志斎、豊田天功のほか、飛田勝太郎、秋山豊之助、国友与五郎、石河幹二郎、北条総五郎、杉山千太郎らである。彰考館の創設のときには全国から学者を招聘せねばならなかったが、弘道館では、洋学などの一部をのぞいては、それが必要なくなっていた。

会沢正志斎の南街塾

会沢正志斎も師の幽谷と同様に私塾を営む。開設は比較的遅く、三九歳のときであった。そのかわり、一八歳で彰考館生員（書記）となった三年後、江戸の藩邸勤務となった会沢は、二三歳の一八〇四（文化元）年から藩主治紀の子息たちの教育に携わるようになる。二年後には七歳の斉昭の教育がはじまった。『及門遺範』で伝えられて幽谷の教師像は、弟子として幽谷を敬慕しつづけた会沢自身の教師像でもあると見ねばならないであろう。四書五経による儒教の基礎から神儒一致の教育に努めていたと考えられる。その後斉昭が会沢によせた信頼から考えても、若き斉昭にあたえた会沢の教育的影響の大きさが想像される。

会沢の一般士庶を対象とする塾が開かれたのは江戸から水戸にもどった一八二〇（文政三）年、幽谷の青藍舎と重なる時期もあったが、幽谷の死後はその後継の役割もはたしていた。幽谷の子である東湖も会沢の塾の会読にしばしば参加している。城下南町に南街塾の看板を出したのは一八三〇（天保元）年であった。

会沢も、彰考館総裁、郡奉行、弘道館教授頭取（小姓頭取を兼任）などの重職を歴任しながらも、塾での教育に力を注いでいた。一八四六年の謹慎処分で弘道館教授頭取を辞したときには塾も閉ざすが、一八四九（嘉永二）年には塾を再開、以後教育に専念する。一八五三年には弘道館にも復帰する。学問事業一致の方針から、藩政の役職をになっていたが、比重は教職におかれた。この点で、藩政・幕政にふかく関わっていた東湖と対蹠的であった。

会沢の南街塾の特徴として注目されるのは、他藩の志士たちが訪れたところにもある。一八二五（文政八）年に著わされた『新論』が写本の形で流布、それで会沢の教えをうけることが全国の志士の憧れの的となった。記録が残っているだけでも二〇カ国、四〇名を超える。西国からの留学が多い。一八四一年には久留米藩の木村三郎が南街塾に学び、つづけて、翌年には横井小楠に水戸の状況を伝えていた同藩の村上守太郎が入塾し、二人の帰国後の一八四四年には、その関係で『新

論』に親しんでいた真木和泉が水戸に会沢を訪問する。その後、一八五一年には、長州藩の吉田松陰が会沢を訪ねた。ここで、松陰は『日本書紀』などの日本史を学ぶことの大切さを教えられる。友人の来原良三へは「客冬水府に遊ぶや、首(はじ)めて会沢、豊田の諸子に踵(いた)りてその語る所を聴き、輙(すなわ)ち嘆じて曰く、身皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らずして、何を以てか天地に立たん、帰るや急に六国史を取りて之を読む」との手紙を送り、事実水戸学の書物とともに日本史の関係書を愛読するようになる。[35] 儒教を重視していた会沢であったが、松陰には日本史の勉学不足を指摘していたのである。その後、その縁で、萩の明倫館で松陰の教えをうけた赤川淡水が一八五五年から三年間南街塾の塾生となって会沢に学んでいる。

会沢も私塾では学徒の自発性を大切にした。孔子が「憤せざれば啓けず、悱(ひ)せざれば発せず」(『論語』述而篇)というように、自発性のない学徒の教育は無駄であると考えていた。[36] 遠方の地から水戸を訪ねた多数の若者を温かく迎えたのも、この自発性を買っていたからであろう。

水戸藩の有望な若者も集まる。会沢の塾からも、石河幹二郎、茅野伊予之介、内藤耻叟、寺門謹らを弘道館の教官に送り出した。

藤田東湖の青藍舎

父と青藍舎出身の堀川潜蔵(のち郷校・敬業館の初代館長)から手ほどきを受けた東湖は、一四歳のとき幽谷に連れられて上府(一歳年上の豊田天功も同行)、江戸で文武の教育をうけるが、二二歳のときの一八二七(文政一〇)年、父の幽谷が病没したため家督を相続、青藍舎もひきついだ。このころ青藍舎には寄宿生が五、六名、通学生が一〇数名おり、会読形式の授業を毎月六回、五と一〇の日におこなっていた。

塾を引き継いだが、藩主継嗣問題では斉昭擁立の中心となって獅子奮迅、襲封後は彰考館総裁代役をつとめるとともに、斉昭の側近として、郡奉行、江戸詰め通事などを歴任、弘道館建設にあたっては『弘道館記』を起草、開館後には弘道館掛に就任していた。塾の教育には十分な時間が割けなかった。

しかし、一八四四（弘化元）年には斉昭の致仕・謹慎に連座して江戸・小梅町で幽閉の身になり、辛うじて読書と著述が許されただけとなるが、そのおかげで『回天詩史』『常陸帯』『正気歌』が成る。父の幽谷の場合と似ている。水戸・横竹熊に移されてからは斉昭の内命で書きはじめた『弘道館記述義』を完成させた。その間は塾の教育も中断を余儀なくされたが、一八四九（嘉永二）年ごろからは謹慎が緩和され、横竹熊の自宅には門人の出入りが許され、一八五二年には青藍舎が正式に再開する。塾生の数もしだいに増える。生活のためにも多くの塾生を引き受けねばならなかったのである。だが、東湖の家は狭くそれ以上の内弟子を受け入れることができなかったようだ。会沢の塾とちがって、塾生の多くは藩内出身であった[37]。

『弘道館記述義』の執筆に力を入れていた東湖は、『弘道館記』の精神を青藍舎でも実践しようとしていた。一八四九年に同志の原田兵介が二人の子供の入門を懇請したのにたいして、東湖は、「前略、俊秀の子弟を見立て切磋琢磨仕り、神儒文武合一の学風、天下後生に相伝ひ候儀、愚生終身の心願に御座候」と返答している。また、一八五二年に後輩の寺門政次郎にあてた書簡には「前略、学問は実学に之なく候ては却て無学にも劣り申候。弘道館記中に、忠孝二なく文武岐れず、学問事業其の効を殊にせずと遊ばされ候段、実に学者（学生のこと）立志の模範、志士報国の根本に御座候」とある[38]。教育精神は幽谷や会沢と変わりがない。それでも、東湖は弘道館では疎かになりがちであった『弘道館記』の精神を強調していたのである。

それだけでない。社会の現状にたいする東湖の悲憤慷慨は塾生の心を動かしたであろう。東湖が幽閉されていたときに

つくった『正気歌』も塾生たちを鼓舞したにちがいない。天地にみち、道義をつらぬく「正気」を全うしなければならないとして、「嗟予万死すと雖も、豈汝（正気のこと）と離るるに忍びんや。屈伸天地に付す、生死又何か疑はん。生きては当に君冤を雪ぐ可く、復綱維の張るを見ん。死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん」と結び、天皇と主君・斉昭のために命をさえ捨てる覚悟を詠う。この『正気歌』は「三度死を決して而して死せず」とはじまる『回天詩史』とともに、全国の志士たちに競って吟じられるようになった。

塾生の比較的多かった東湖の塾では、クラスは一五歳以下の童子、一六歳から二〇歳までの少者、二〇歳以上の冠者に分けられていた。会読はそれぞれ月三回、冠者むけの会読では城下の他の家塾の塾主も参加、政治をめぐる問題になると議論百出だった。会沢と東湖の両塾に顔をだすものも少なくなく、そこでは、書物の内容の理解をめぐって激論が交わされたのもしばしばであったという。[39] 尊攘派の研究会の趣があった。

もちろん、東湖も塾生の個性を重視、個性の長所を伸ばすことに心掛けた。また、年齢を考慮したクラスの構成をして、それに応じた指導をしていた。[40]

後世名を馳せた門人には前述の原市之進のほかに桜仁蔵、茅根伊予之介らがいた。幕政にも積極的に関わって、師の東湖と同様、学問事業一致に生きた行動派が育つ。小東湖といってよい人物たちであった。それは、青藍舎から郷校に派遣された多くの教師の教育態度でもあった。すでに桜田事件の斎藤監物や筑波山挙兵の竹内百太郎について見たように、東湖の私塾での教育が郷校の教育に生かされた。

しかし、一八五三（嘉永六）年六月のペリー来航を機に斉昭が幕府の海防参与となると東湖は海防掛に任命されたため、水戸の青藍舎は中断を余儀なくされた。この東湖の青藍舎の教育精神を継承したのが、原市之進の営む伍軒塾。東湖が大地震で亡くなった翌年の一八五六（安政三）年に開かれた。伍軒塾からも天狗党の藤田小四郎、田中愿蔵や桜田門外の変に

参加した広岡子之次郎がでた。しかし、原も一八六二（文久二）年には江戸にのぼり、国事に奔走することになる。

東湖も原も教育に従事した期間は短い。学問事業一致を実行するためには止むをえなかった。藩主斉昭の知遇をえ、藤田東湖、会沢正志斎とも親交があった加倉井砂山はふたりとは逆に、教育に専念できた人間であった。その塾・日新塾の場所は城下から二里ほど離れた茨城郡成沢村（現水戸市）。近在のものは通学するが、遠方出身のものは寄宿する。水戸藩最大の私塾であった。この塾も、桜田事件の斎藤堅物、鯉淵要人、筑波山挙兵の藤田小四郎、飯田軍蔵らを輩出する。

9　私塾教育の意義

私塾の力の源泉は教育の自由さに帰着する。塾生には身分の制限がない、農民でも町人でも受け入れる。地域的な壁がない、全国どこの人間でも塾生となれる。入学が藩士に限られる弘道館とは対極の位置にある教育の場である。

身分の制限がなかったことが、水戸学を郷士や農兵、医師や神官といった階層のものにも拡大させ、郷校の活動の原動力ともなった。地域的制限のなさは、水戸学を全国に波及させることになった[41]。なにを教えるかも自由、その教育をうけるかどうかも塾生の自由。教師と塾生の意欲で成立する教育である。塾生の個性が生かされ、また、塾生は教師の生きざまを見ながら育つ。私塾は全人教育の場でもあった。

弘道館の本開館を控えて、訓導や舎長らが、弘道館の低迷の原因に学生と教師との人間的関係の欠落をあげていたのも、私塾との比較から発せられた批判であったろう。彼らは私塾的教育に憧れていたのである。しかし、現実には、大規模で、義務制の藩校ではむずかしい要求でもあった。

もちろん、私塾にも難しさがある。教師が学問事業一致に生きねばならないとすれば、私塾は長期間維持しがたい。加

倉井砂山の日新塾のように長く継続した塾もあったが、会沢や東湖の塾では、政治の仕事が忙しくなると、私塾の教育からは離れねばならなくなる。塾生はその教師の行動からも学ぶ。

その逆に、政争に巻き込まれ蟄居や謹慎の身になることもあった。しかし、権力の座から排除されたことで、会沢や東湖は私塾教育に力をいれることができた。それによって、水戸学は全国の志士にも浸透する。とくに注目されるのは、会沢に学んだ真木和泉と吉田松陰であった。真木は蟄居を命ぜられたとき私塾・山梔窩（くちなしのや）で、幽閉の身にあった松陰は松下村塾で子弟の教育にあたっていた。東湖に心服した横井小楠も熊本城下に塾を開き、のちには郊外の沼山津の四時軒で教育に専念した。

幽谷も東湖も会沢も教育とともに著作活動にも力をいれた。それも、多くは蟄居や謹慎のときの仕事であった。幽谷の主著『勧農或問』は蟄居中に執筆されたのだが、東湖の『回天詩史』『常陸帯』『東湖随筆』『正気歌』『弘道館記述義』も会沢の『下学邇言』『江湖負喧』『泰否炳鑑』『泮林好音』『及門遺範』も蟄居・幽閉のときのものであった。幕政や藩政を追われたところで、全国の志士に影響を与えた仕事をしていたのだ。水戸学におけるこの「事業」の意義も見過ごされてはならない。

東湖についていえば、江戸との行き来も多く、塾の運営に支障をきたしたであろうが、そのかわり、他藩の人間との交遊が広がった。とくに、斉昭の側近として江戸に招致されてからの三年間、前述の横井小楠をはじめ、橋本左内、西郷隆盛、佐久間象山、梅田雲浜ら多くの人士が小石川藩邸に住まいのあった東湖のところに集まってきた。江戸の東湖宅は、水戸の青藍舎における冠者の教室の延長であるかのよう、水戸の会沢の南街塾とならんで攘夷運動の全国へむけての震源地となる。

10　水戸学の広がり――維持の思想から変革の行動へ

水戸の志士たちはみずからの手で新時代を切り拓くことはできなかった。その仕事を担ったのは薩長を中心とする勢力、彼らに土肥を加えた藩閥政府が新時代に君臨する。そこに水戸の志士たちの姿は見られなかった。しかし、なにがこの新しい時代を生み出した思想的な原動力であったのか、と問われるならば、なによりも水戸学の思想をあげないわけにはいかない。水戸学に発した尊王攘夷論が体制をその内側から揺り動かしはじめたのである。

たしかに、尊王攘夷論は幕藩体制の秩序意識を強化しようとするところに狙いがあった。そのために理想としての体制を儒教的名分論に見いだしたのである。しかし、そこで重大であったのは、現実の幕政に追従しようとしたのではなかった。幕府もその分を尽くさねばならないのであり、そうでなければ糾弾されてよい。そこから、現幕閣を打倒しようとする桜田門外の変のような行動も生まれていたのである。水戸学には理想とする政治の主張があったからこそ、現実の政治にたいするきびしい批判も生まれたのであった。

といって、水戸の志士たちも幕藩体制は維持されねばならないと考えていた。桜田門外の変でも、狙いは現幕閣の打倒をめざしたのであって、徳川幕府そのものを打倒しようとする討幕にあったのではなかった。条約の無断調印や安政の大獄の暴挙に走る井伊を天に代わって斬り、幕政を正道にもどすことにあった。天狗党の筑波山挙兵も攘夷実行を幕府に迫ろうとするものであった。そのなかから、田中愿蔵のような討幕の動きもでていたが、主流とはならなかった。水戸学の基本は敬幕論にあった。ここに水戸学の限界を認めねばならない。だが、水戸学を学んだ真木和泉や吉田松陰は敬幕論の限界点を超えて討幕論にむかう。尊王敬幕の論理と明らかにした会沢の『新論』は幕府否定の論理を提供していたのでもあって、彼らはそこから出発した。その討幕の行動の姿勢でも水戸学が見本となった。わけても、桜田門外の変は全国の

志士たちの心を動かした。「幕府の与み易きことを広告した」だけでない、命を賭して死地に臨む水戸の志士の生きざまに鼓舞された。水戸学の論理と水戸の志士の精神は全国の志士に浸透していく。

その精神を詠ったのが、多くの志士たちに愛誦された東湖の『正気歌』であった。その本歌は父幽谷の膝下で聞かされて育った宋の名臣・文天祥の『正気歌』、孔子や孟子にあった仁・義を守りぬくためには、自分の生命を犠牲にしてもよいとの思想をふまえたものであり、東湖の『正気歌』もそれを継承していた[42]。前に『論語』の「身を殺して以て仁を成すこと有り」ということばをあげたが、『孟子』にも「生も亦我が欲する所なり。義も亦我が欲する所なり。二者兼ぬること得可からずんば、生を捨てて義を取る者なり」（告子上）とある。孟子の「浩然の気」である「正気」は天地にみちた気であるとともに、道義に配された気なのだが、この気をもって天皇と主君・斉昭に殉じようといとする[43]。ひたむきさ、それが水戸藩内での党争を激化させ、多くの人材を失わせることになるのだが、そのひたむきさが、水戸藩を超えて多くの志士を討幕に駆り立てたのだ。

そして、水戸学が教育の思想であったことが想起されねばならない。尊王攘夷の実現にも、教育に期待を寄せていたのであり、弘道館もそのために建てられた。弘道館の教育は成功したとはいえなくても、水戸に開かれていた私塾をとおして攘夷運動に命を賭ける若者が育っていった。全国的に見てもそうである。幕府や藩の学校は日本の危機に正面から対応もできなかったなかで、水戸学者の警咳に接した志士たちが帰国後に開いた私塾が新しい時代を切り拓こうとする多くの志士を育てていたのである。

11 むすび

新政府を樹立した西国諸藩の勢力にとって出発点ではもっていた水戸学の尊王攘夷論は余計なものとなる。彼らに行動の見本を示してくれた水戸の志士のひたむきさも消える。強兵のための積極的な開国もすすめられる。そこで求められたのは科学技術としての洋学的実学となる。水戸学的実学は不要となる。

しかし、水戸学にはもう一度の浮上と沈下のときが待っていた。国家主義の台頭とともに水戸学は光があてられた。とくに、国家主義教育の「聖典」であった『教育勅語』は水戸学の系譜にあると見られ、水戸学が再評価される時代が到来した。『教育勅語』に『弘道館記』の精神を読みとろうとする。だが、戦争に敗れ、『教育勅語』にかわって、教育の基本を「人格の完成」においた『教育基本法』が制定されるとともに水戸学はふたたび葬られた。国家のための教育から、個人としての人間のための教育に転換したのである。

そうであったが、いま私たちは、「人格の完成」の教育の実現がきわめて困難であったことを率直に認めねばならない。長く支配した国家主義教育が「人格の完成」を捉えにくくしたのに加えて、戦後の高度成長によってもたらされた「人格」よりも「人材」を重視する風潮が困難の度を増している。戦前の軍学協同が産学協同に置き換えられて、産業界のための教育に突き進む。大学をみても、「人格の完成」のためであったはずの教養教育はかぎりない後退を余儀なくされた。それに、教養を担当する教師にも教養の意味がよく理解されていたとはいえなかった。産業界のための教育という攻勢になにを守るのかさえ分からなくなっていたのである。教師の専門志向が教養教育の自壊を加速させることにもなった。

現代の社会の荒廃はこの実利教育偏重と無関係ではありえない。それを座視するのでは教育者ではない。どんなに困難であっても、「人格の完成」の課題にとりくまねばならないのだ。その点でも、江戸時代の教育から学ぶべき点は少なくな

いと私は考えている。水戸学についても、それが教育基本法の精神からもっとも遠い存在であるように見えながらも、「人格の完成」をめざしていたことを思い起こしてほしい。わけても、水戸学が教育の基本とした「君子」あるいは「成人」をめざした教育は見直されるべきだと思う。それは、かつて日本人の心に浸透していたものなのだ。そして、もうひとつ想い起こしてほしいのは、それが実現できたのが私塾であった、ということである。ここに教育の改革の端緒を求めてよいのではないか。

もちろん、幕末に生まれた多数の私塾は、一八七二年の「学制」にさいして、藩校や郷校とともに、廃止に追い込まれた。教育は国家体制に組み込まれたのである。教師の養成もいち早く師範学校の設立で対応された。それは戦後の教育でも変わりがない。むしろ、今日では大学をふくめて教育の国家化が規模を拡大して進行している。私塾の精神をうけついでもいた教育の自治は瀕死の状態、中央集権的な管理教育が強化される。大学さえもが、会沢のいう「胥吏の世」となろうとしている。自治を放棄して代わりに浮上したのが、競争としての自由化、その競争のためには教育者による自治は邪魔物とされているのだ。

それだけに、なおのこと私塾が求められる時代だといえる。私塾教育を実現するのは容易ではないのだが、しかし、さまざまな形で私塾的な教育は可能であるはずだ。管理教育がすすむ学校のなかでも不可能ではない。これまでにも、「人格の完成」をめざす私塾的な教育の努力もさまざまな形でなされてきた。たしかに、会沢ものべていたように、塾生の自発性が前提となる。孔子のいう「憤せざれば啓けず、悱せざれば発せず」だ。それは難しく見えるが、長い教師生活から私は、どんな学生でも心の底には自発性を有していることをよく知っている。

問題は私たち教師のほうである。学生の心の底にある自発性をどううけとめるか。教師のほうにそれをうけとめようとする自発性があるのかどうかが問われているのだ。知識を学生に授ける教育にはつとめても、学生の心をつかむ努力がど

れだけなされているか。この点で私は大きな疑問を抱いている。教育の可能性、教育が人類の未来に貢献できるのかどうかはここに尽きる。この点においても、なお私たちは水戸学の教育から学ぶことは少なくない。

注

水戸学関係の著作については以下のような書物を利用した。

藤田東湖『常陸帯』、同『回天詩史』については、高須芳次郎編『水戸学大系一・藤田東湖集』水戸学大系刊行会、一九四〇年。会沢正志斎『迪彝篇』、同『下学邇言』、『読直毘霊』については、高須芳次郎編『水戸学大系二・会沢正志斎集』水戸学大系刊行会、一九四一年。会沢正志斎『弘道館学則』、同『退食間話』、同『学問所建設意見書稿』、同『及門遺範』については、瀬谷義彦『会沢正志斎』文教書院、一九四二年。藤田東湖『正気歌』については、西村公則『藤田東湖』光書房、一九四二年。会沢正志斎『学制略説』については、文部省『日本教育史資料第五巻』臨川書店、一九七〇年。藤田幽谷『正名論』『丁巳封事』、徳川斉昭『告志篇』、徳川斉昭（藤田東湖）『弘道館記』については、『日本思想大系53・水戸学』岩波書店、一九七三年。

(1) 『日立市史』日立市役所、一九五九年、三五七ページ以下。

(2) 『藩史事典第二巻』雄山閣、一九八九年、一二ページ。

(3) 江戸時代の洋学や福沢の物理学なども実学と称されていたように、実学ということばは多義的である（源了圓『実学思想の系譜』講談社、一九八六年）。

(4) 『日本の名著29・藤田東湖』中央公論社、四〇三ページ。幽谷たちは『大日本史』の冒頭の神武天皇の前に天孫降臨をふくむ天照大神から鸕鷀草葺不合尊までの神話を加えていた。

(5) J・ヴィクター・コシュマン『水戸イデオロギー』田尻祐一郎・梅森直之訳、ぺりかん社、一九九八年、五九ページ。

(6) 『読直毘霊』（一八五七年）で会沢正志斎は、本居宣長が『直毘霊』で説く記紀の神話にもとづく国家論に賛意を表しながら、「皇統の正しくましますことも、其の実は、天祖伝位の御時よりして、君臣・父子の大倫明らかになりし故なることを論ぜざるは遺憾と云ふべし」とのべて、儒教を排撃する宣長の記紀解釈に異議を唱えていた。

(7) 和島好男『昌平校と藩校』至文堂、一九六二年、一七一ページ。

(8) 二年後の一八四三（天保一四）年には、小石川の藩邸内に弘道館の分館が設立され、教授・杉山復堂のもとに、総員九名の陣容で運営されていた。

(9) 鈴木映一『水戸藩学問・教育史の研究』吉川弘文館、一九八七年、四五四ページ。

(10) 鈴木博雄『近世藩校に関する研究』振学出版、一九九五年、二七〇ページ。

(11) 和島好男『昌平校と藩校』至文堂、一九六二年、一四三ページ。

(12) 弘道館の所蔵する弘化四年、嘉永二年、嘉永三、四、五、六、七年、安政二、三、四、五、七年の「日記」によると、弘化四年一二月二〇日、嘉永二年一二月二〇日、嘉永三年九月一三日、一二月二〇日、安政七年一月一六日に『日本書紀』の記事がみえる（『茨城県立歴史館史料叢書3・弘道館史料2』茨城県立歴史館、二〇〇三年）。

(13) 梶山孝夫「文館の教育」『水戸史学』第十五号、一九八一年、七〇ページ。

(14) 瀬谷義彦『会沢正志斎』文教書院、一九四二年、一四七ページ（『息邪漫録』）。

(15) 前掲、鈴木映一『水戸藩学問・教育史の研究』二八九ページ以下。当時水戸に住んでいた藩士の数は把握しがたいが、天保の城下図からは七八二の武家の戸数を数えあげることができる。ただ、これに記載されていない武家もあるので、この数よりは多いと見ねばならない（『水戸市史・中巻（三）』水戸市役所、一九七六年、三五五ページ）。

(16) 『日本の名著30・佐久間象山・横井小楠』中央公論社、一九八四年、三六二ページ。
(17) 同書、三六二ページ。
(18) 前掲、鈴木映一『水戸藩学問・教育史の研究』三四六ページ。
(19) 薗部等「弘道館の蔵書について」『水戸史学』第十五号、一九八一年、九一ページ。
(20) 『水戸市史・中巻（三）』水戸市役所、一九七六年、五二〇ページ。
(21) 瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』山川出版社、三五ページ。
(22) 同書、一九九ページ。
(23) 荒川久壽男『維新前夜』日本教文社、一九七三年、一七四ページ。
(24) 前掲、瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』一〇七ページ。
(25) 瀬谷義彦・豊崎卓『茨城県史』山川出版社、一九七三年、一三三ページ。
(26) 前掲、『水戸市史・中巻（三）』一一一五ページ。
(27) 徳富猪一郎（蘇峰）『近世日本国民史43』時事通信社、一九六五年、一ページ。
(28) 金沢春友『水戸天狗党遺聞』富貴書房、一九五五年、六九ページ。
(29) 徳富猪一郎（蘇峰）『近世日本国民史54』時事通信社、一九六二年、三九ページ。
(30) 寺尾五郎『倒幕の思想＝草莽の維新』社会評論社、一九九〇年、一二七ページ。
(31) 前掲、鈴木映一『水戸藩学問・教育史の研究』二四四ページ。
(32) 安達鑛太郎『常陸多賀郡史』（旧版一九二三年刊）名著出版、一九七二年、四三四ページ。
(33) 西村公則『藤田幽谷』平凡社、一九四〇年、一八四ページ。

(34) 「君子」は孔子のキーワード、『論語』には一〇九回も登場する。この『及門遺範』の「君子」についての文でも、つづけて「故に論語は君子の二字以て之を始終す」とのべている。「君子」を育てることが孔子の教育の目標であった。「君子」に対するのが「小人」である。「君子」とともに完成された人物の意味でつかわれる「成人」は「憲問篇」にあらわれる。子路から「成人」の意味を問われた孔子は、今日では完璧な「成人」は求めがたく、「利を見て義を思ひ、危きを見て命を授け、久要（古い約束）平生の言を忘れずんば、亦以て成人と為す可しと」答えている。

(35) 吉田松陰の会沢正志斎からの影響については前稿でのべた（荒川紘「教育者・吉田松陰と儒教精神」『静岡大学人文学部人文論集』第五三号の二、二〇〇三年）。

(36) 西村公則『会沢伯民』大都書房、一九三八年、一九七ページ。松陰はこの自発性「志」をよび、塾生の入塾にさいしてはこの「志」を重視したという。

(37) 西村公則『藤田東湖』大都書房、一九三八年、二六〇ページ。

(38) 安省三『水戸学とその解説』関東通信社、一九五七年、三四一ページ。

(39) 前掲、西村公則『藤田東湖』二六一ページ。

(40) 同書、二六〇ページ。

(41) 松陰の弟子であり、攘夷運動をうけついだ久坂玄瑞も高杉晋作も水戸にあこがれた。久坂は水戸まで足をのばし、高杉は会沢門下である笠間の加藤有隣を訪問している。

(42) 上山春平『明治維新の分析視点』講談社、一九六八年、三五ページ。

(43) 『正気歌』は全国の志士に愛唱されていた。吉田松陰はみずからも『和文天祥正気歌韻』を作成していた。

本稿をまとめるに当たり、栗田聰氏（水戸市在住）には青藍舎や南街塾が所在した地を案内していただき、また多数の水戸学関係の資料を送っていただいた。江尻光昭氏（高萩市在住）からは、松岡の就将館について教えをうけた。海野薫氏（日立市在住）からは、助川海防城や松岡城関連の史跡を案内していただき、その歴史についての話を聞けた。茨城県歴史館の笹目礼子氏からは弘道館の「日記」についての資料の所在を教えられ、その内容にかんしてご意見をうかがうことができた。ここを借りてお礼をのべたい。

付記

私の故郷の福島県の塙町には筑波山に挙兵し当地で斬首に処せられた天狗党の幹部田中愿蔵の記念碑がある。処刑地とされる塙代官所跡の近くにたつ碑を中学生のとき友人に誘われて見にいったこともあった。処刑された人間の碑なのに、なぜこんなに立派なのか、不思議に感じたものであった。

この記念碑の建立に尽力したのが、後に塙町長となる郷土史家の金沢春友さんである(町の人たちは親しみをこめて春友（はるとも）さんとよんでいた)。天狗党の研究者で、『水戸天狗党遺聞』はそれまでの愿蔵像を見直そうとする意欲的な著書であった。大仏次郎も『天皇の世紀』でこの春友さんの研究を利用しており、そのため、大仏次郎は何度か塙を訪れていたと聞いている。

私は大学から帰省する汽車の中で春友さんと話し合う機会があった。春友さんが母の従弟の秦（しんの）太郎さん（当時塙郵便局長）と一緒だったので、同席させられたのである。そのとき春友さんからアイスクリームを御馳走になったのはよく覚えているのだが、なにを話したかは記憶にない。田中愿蔵のことについて話をしたとは思われない。なにしろ私は物理学を学んでいた学生であった。

しかし、天狗党や田中愿蔵といえば、春友さんとは別に、祖母から聞かされていたことがある。ある戦乱で祖母の生家のものたちは貴重品を裏の竹藪に埋めて逃げ、その後もどって掘り返してみたものの、そこにはなにも残っていなかった、という話である。祖母はどんな戦乱であったかについては話してくれなかったが、後で水戸藩の歴史を学んで、それが天狗・諸生の乱であることを知った。田中愿蔵による助川海

防城の占拠につづき、助川海防城の藩士たちは幕府・諸生党との戦いに追われるのだが、そのとき城内に住む家臣の家族はそこを逃げねばならなかったのである。祖母の生家の安達家は城主の山野辺家の家臣で、天狗・諸生の乱がおこったのは祖母の祖父にあたる安達勝功のときであった。

『日立市史』や神永敏子氏の『助川海防城勤王殉難烈士・幕末水戸藩士の眠る丘』（風濤社、一九九七年）を読んでわかったことだが、城内に学校・養生館が創設されると教授に就任した安達勝功は、沈毅重厚の性格ながら尊攘激派に与した藩士のひとりで、助川海防城での戦いでも落城するまで城に残り幕府・諸生党軍と戦ったという。明治元年の弘道館の戦いでは山野辺義芸にしたがい、傷を負いながらも佐幕派の市川軍に勝利している。

しかし、幕府が倒れ、天皇を頂点とする明治政府が生まれながらも、佐幕派と戦った尊王派の多くの水戸藩士は苦難の道を歩まねばならなかった。「播種は我、収穫は他」（徳富蘇峰）であった。勝功は安良川（現高萩市）の地に家を求め、養生館時代の経験を生かしてか、明治七年に、三九歳の身で水戸拡充学校をへて、「学制」で誕生した小学校の教員になる。

維新のとき七歳であった勝功の長子の鑛太郎も師範学校をでて教員生活を送る。歴史を尊んだ水戸学の血をうけついでいたのだろうか、定年後には『常陸多賀郡史』を執筆している。私がこの論稿をまとめるにあたり、松岡にも三つの私塾があったのを知ったのはこの安達鑛太郎の著作からであった。

私には曾祖父となる鑛太郎は私が生まれる前に亡くなっていたのだが、これも水戸学の血なのだろうか、家庭でも厳しい教育者であったことを祖母や大叔母たちから聞かされていた。しかし、私が小学校に入る前の戦争中、私の実家で暮らしていた鑛太郎の妻つまり曾祖母は優しい人であった。私に最初に読み書きを教えてくれたのもこの曾祖母であった。なぜか、今日が何月何日であるかは新聞の上の欄外に載る日付けを見ればよいということを教えられたのを今でも忘れないでいる。もし小さな子供から同じ質問をされたら、私も同じように答えるかもしれない。

曾祖母が安良川にもどってからは、教師役は曾祖母の娘である祖母になった。祖母は松岡の手綱の阿久津家の養女となっていたが（養父の父阿久津彦五郎は松岡の就将館の槍術師範で松岡の私塾のひとつ阿久津塾も開いていた）、酒造業を営んでいた私の実家に嫁いできた。そのようなことで苦労も少なくなかったと思う。それでも、祖母も曾祖母に似て優しく、よくお伽噺や昔話を聞かせてくれた。それだけでない、いま思い返してみると、祖母からは礼儀の大切さとともに「文は人なり」を教えられていたような気がする。実家の座敷には鑛太郎の筆になる、右から「壽似山」と書かれた扁額がかけられているが、それは「壽、山に似たり」と読むということを祖母から教えられて早くから知っていた。これも、「文は人なり」の教育だったのだろう。私の受けた最初の漢文教育でもあった。

私の幼・少年時代には、かすかながら、周辺には水戸学の空気が残っていたようだ。礼儀も「文は人なり」もあまり身につかず、漢文もきちんと学ぶ機会がなかったものの、私がいつしか歴史学に目覚め、水戸学の思想と教育の歴史を取りあげるようになったのは、かすかでも曾祖母や祖母をとおして水戸学の空気を吸っていたからなのかもしれない。